

地球にやさしいプラトン

——プラトン後期思想における自然の価値の理論——

早瀬 篤
Atsushi HAYASE

Whitehead said that western philosophy was all footnotes to Plato. The truth of this epigram becomes especially evident in the second half of the twentieth century as we realise how many of our current problems Plato was aware of. This is the end of the Cartesian era, and may be the end of the Aristotelian era, but in the strange cosmic astronomy of the wandering *Zeitgeist* we are closer to Plato now than in many previous centuries. (Murdoch 1992, p. 175)

1. はじめに

「現代におけるもっとも重大かつ緊急の課題である環境問題は我々にどのような反省を迫っているのだろうか？」——この問いに対して提出されてきたひとつの回答は、「我々が無反省なまま採用してきた環境に対するイデオロギーを改めなければならない」というものだ。この改めるべきイデオロギーの起源はルネッサンス時代の自然魔術に物質的自然という観念を置きかえた17世紀の科学革命を超えて、ギリシャ＝キリスト教的自然観に求められる¹。神は自然

¹環境問題の原因となっている世界観を歴史的に求める試みとしては、Passmore (1974) の概観が今なお哲学的に深みのある分析を含むものとして参考になるだろう。環境科学の歴史全体を概観したものとしては Bowler (1992) が挙げられる。

を人間が利用するために与えたのだというこの時代にはじまった人間中心主義的なものの見方が、歴史的にさまざまな変容を遂げつつ現代の環境問題の奥底にしっかりと根づいているというのである。この人間中心主義はさらに価値についての思考様式に分析され、環境倫理学という分野の中心的な主題としてさまざまな角度から検討されている。本稿の主題は、この価値の問題に分析された主張に対して、プラトン哲学からはどのようなアプローチがなされるかということ、後期対話篇で追求される生成する世界についての価値の理論を手がかりにして考察してみようというものである。

この考察の手続きは次のようなものとなる。まず第2章においては、環境倫理学においてこの人間中心主義的な価値の理論にどのような分析が加えられているのかをあらためて駆け足で検討する。ついで第3章において、その理論と比較できる形でプラトンの生成する世界についての価値の理論をいくつかのテキストにもとづいて再構成することを試みる。

2. 非人間中心主義的価値観のプログラム

はじめに「なぜ価値の問題が環境問題に関わるのか？」という基本的な論点を確認しておくことにしよう。もともと多くの環境倫理学者が価値の問題を論じるようになったのは、人間以外の存在や出来事が道具的価値 (instrumental value) だけでなく内在的価値 (intrinsic value) を持つと論証できるなら、我々の自然に対する振る舞いを人間に都合のよい主観的な仕方ではなく客観的な仕方では決定できるだろうし、したがって環境にやさしい規範を見出すことができるだろう、という希望的観測にもとづいている。このような人間中心主義からの脱却を企図する立場からは、伝統的な西洋倫理観の本質的な汚点はまさしく自然における内在的価値の存在を見落としており、自然は本質的に道具的価値しか持たないとしてきたところにある。そしてこのような伝統が我々の思考様式に意識的無意識的に作用し、人間による大規模な自然破壊を促してきたのだというのだ²。

ところで、「内在的価値」——「それ自体のうちに」ある価値——という言葉は多義的に用いられる傾向にあり、少なくとも次の二つの意味ははっきりと区別されなければならない³。

² こうしたプログラムをはじめて明確なかたちで提示したものとして Routley (1973) が有名である。

(a) (人間にとっての) 非道具的価値：自然がこの意味で内在的価値を持つということは、自然はさらなる別の目的を追求するための手段としての価値を持つのではなく、それ自体が目的であり、その意味で「それ自体のうちに」価値を持つ。このことは、例えば自分の子供に対して将来自分を養ってくれるというさらなる目的のゆえに愛するのではなく、子供自身の幸せを願って愛するというときの態度と類比的である。したがって、自然に非道具的価値を認めるならば、人間は食料や材木として利用するためではなく、自然そのものの繁栄を目的として自然に向かい合わなければならない。

(b)客観的価値：自然がこの意味で内在的価値を持つということは、自然は人間あるいは意識する主体とは独立に「それ自体のうちに」価値を持つことを意味している。だから、自然がこの客観的価値を持つと認めることは、科学的自然主義 (scientific naturalism) が標榜するような、人間の存在によってはじめて価値的に中性な事物が価値によって色づけられるという観念を拒否すること、言い換えるなら、人間のいない世界にあっても自然本来の姿が価値に充溢しているという世界観を採用することである。

この「内在的価値」の二つの意味を区別するなら、人間中心主義的な価値観を脱出するためのプログラムとは、(a)に見られるような自然に対する我々の行為の規範を(b)のメタレベルに帰属する客観的価値によって基礎づけるものであると明確化できる。これを「非人間中心主義的価値観のプログラム」と呼ぶことにしよう。

このプログラムに賛成するかどうかはともかく、多くの環境倫理学者がこの方向での議論を模索している⁴。論者は当然ながらまず(b)の内在的価値の存在を論証する。しかし、それをどのようなものとしてとらえるのか、そしてどのような仕方で論証するのかということについては多様な議論が提示されている。

³Cf. O'Neil (1992, pp.131-132). なお、O'Neilはこの二つの意味の他に、「ムーア的意味での内在的価値」——問題となっている事物の内在的本性だけに依存する価値であり、他の事物の存在（あるいは参照）に関わりなく成立するもの——を三つ目の意味として挙げている。しかしながら、O'Neilの議論が示しているように、この意味の内在的価値は自然全般の価値を論じる文脈では議論の中心に位置づけられてはいない。したがって、本稿では「非道具的価値」と「客観的価値」に焦点を絞ることにする。

⁴ただし、Weston (1985) のように、こうした「基礎づけ主義的」な立場で議論を行うこと自体を拒絶する立場も存在している ('The search for intrinsic values substitutes a kind of shadowboxing for what must always be a good fight.' p.317)。

ここでは代表的なものとして(1)食物連鎖にもとづく議論、(2)用語法にもとづく議論の二つを紹介しよう⁵。

(1)食物連鎖にもとづく議論⁶：ここには客観的価値をそれぞれの生き物にとっての非道具的価値に同定し、後者の存在を論証する議論が含まれる。例として牧草と鹿と狼という三つの食物連鎖に注目するなら、この議論は次のように要約できるだろう。まず、鹿が牧草を食べ、狼が鹿を捕食することは、明白に牧草が鹿に、鹿が狼にそれぞれ道具的価値を持つことを示している。次に、牧草と鹿と狼だけが存在している惑星があると想定しよう。すると、この惑星にある道具的価値は、それが道具的価値である以上、外的な目的を持たなくてはならない。そしてそれは狼の繁栄以外にはありえない。したがって、狼は狼にとっての非道具的価値を持つのであり、非道具的価値は人間だけが持つものではないことが帰結する。一端このことが了解されるなら、狼だけが自分たちにとっての非道具的価値を持ち、鹿はそれを持たないという主張は明らかに奇妙である。だから、鹿は鹿にとっての非道具的価値を持つ。同様に牧草は牧草にとっての非道具的価値を持つ。したがって、それぞれの生き物は自分たちにとっての非道具的価値を持つ以上、客観的価値が存在する。

(2)用語法にもとづく議論⁷：この議論はまず次のような命題に着目する。

X is good for greenfly. (Xはアブラムシによい)

この命題はXに何を挿入するかによって次のような二つの観点の違う命題ができる。

(p) Detergent sprays are good for greenfly.

(殺虫剤はアブラムシに有効である)

(q) Mild winters are good for greenfly.

(暖かい冬はアブラムシにとってよいものである)

もちろん(p)は例えばアブラムシを駆除しようとする庭師の観点を示しており、(q)はアブラムシにとっての観点を示している。ところで、(q)のような用語法は、暖かい冬に道具的価値を見出す主体が存在し、その主体は観察者(人間)と独立の価値を享受していることを示している。したがって、人間が存在しない場面においても価値は客観的に存在する。

以上の議論はたしかに自然の(b)客観的価値の存在をそれなりに説得力のある

⁵Rolston (1994, pp.144-148) はこの両者の議論を一貫性なしに使うほかにDNAにもとづく議論というものも提示している。それによるとDNAは規範的なものであるから、DNAを持つすべての生物は価値を持つ。

⁶Cf. Lee (1996, p.156), Hargrove (1992, p.177).

⁷Taylor (1989, pp.60-71), O'Neil (1992, pp.137-138). なお以下のアブラムシの例はO'Neilの議論をそのまま拝借している。

仕方では、こうした議論をする人たちが自然の(a)非道具的価値をここから導出する方法に目を移そう。最初の提案は、この(b)客観的価値をそのまま(a)非道具的価値に拡張するというものだ⁸。つまりこの提案によると、価値が客観的に存在することは、とりもなおさず我々がそのような価値を尊重しなければならないことを告げているのである。しかし、そのようなメタレベルの客観的価値の議論が一様に我々の倫理的規範を制約していると考え根拠はなにもない。とりわけこの理論は、我々が動植物を食料や道具として利用して生きていること、そして我々にとって有害なだけの生物、例えばAIDSウィルスや天然痘ウィルスをもし完全に絶滅させることがないとしたら、それはたんにウィルスが持つ医学的な道具的価値に配慮しているに過ぎないこと、これらのことすべてに否定的な判決を下すことになり、そもそも人間がそれに従いつつ安全に生きることのできるような理論ではない⁹。したがって、すべての生物にとって客観的に価値が存在するにしても、それをそのまま行為の規範に拡張するのは誤りである¹⁰。他方で、(b)客観的価値と(a)非道具的価値のギャップを埋めようとする別の提案は、「我々は客観的善の総量を最大にすることを目指さなければならない」というものである。たしかにそのような方針をとることができれば、我々は「非人間中心主義的価値観のプログラム」を完成させることができる。しかし、このアプローチの致命的な困難は、「善の計算」なるものの方法を明確に提示しないかぎり実行不可能だということである¹¹。また、この両方の提案に当てはまることだが、客観的価値を確保するため

⁸O'Neil (1992, p.141, n.36) では、この提案をする論者としてR. Attfield, H. Rolston III, K. Goodpaster, P. Taylorといった人が挙げられている。また、Lee (1996, pp.151-152 n.9) も、この客観的価値の議論を認めることは「我々の目的にとってのたんなる手段として〔これら客観的価値を持つ主体を〕扱うことは正しくないような文脈が存在することを認めることである」と主張しており、ここに含まれることになるだろう。

⁹AIDSウィルスはこの種の議論できわめて好まれる例である。奇抜な例としてはHargrove (1992, pp.179-180) による映画『エイリアン』の反例（エイリアンのような生物が地球人を襲来してきたなら、彼らの価値について云々する以前に徹底抗戦しなければならない）がある。

¹⁰もちろんここで挙げられた事例を「例外」と看做し、何を例外とするかを決定する別の理論を導入する可能性は開かれている。しかし、この別の理論が人間の価値を中心に考えるなら、結局「非人間中心的価値観のプログラム」としては失敗に終わったことになる。

の議論が射程距離においていたのは生物に限られるから、現在において主要な環境問題である地球温暖化やダイオキシンによる土壤汚染など無生物に関わるものに適用することができない¹²。だから、これらの理論は実行不可能であるだけでなく、理論的対象の枠が狭すぎるという問題も抱えている。

したがって、多くの論者は結局のところ「非人間中心主義的価値観のプログラム」を断念し、「弱い人間中心主義」という立場を採用する¹³。この立場は自分の好き放題に自然を利用し尽くすというイメージによって悪名高くなってしまった「人間中心主義」を自らと区別するために命名されたもので、価値についての特別な理論を用意しているわけではない。むしろほとんど常識的な態度で、我々が生きていく上で美術品や音楽などの芸術作品が我々の生活を豊かにするように、自然が提供する美的環境や人慣れする動物たちを守ることもまた人間の幸福に寄与するのであるから、我々は不必要な環境破壊を避けなければならない、と主張する。

しかし、このような結論は自然の価値を論じる多くの人々にとってきわめて不満足な結果である。森林を例とするなら、「森林は人間が関わらない場面でも価値を持ち、そしてその価値のゆえに人間は森林を伐採してはならない」というような当初企図していた議論は成立しない。この「弱い人間中心主義」は大部分の森林については資材として利用されることを黙認し、保全が行われることがあるとしても、それは人間に提供できる美的環境のゆえに過ぎない。そしてその場合の保全というものは、人間がそこに森林の(a)非道具的価値を認めて森林そのものの繁栄を願っているではなく、自分たちの快樂のための道具的価値を見出しているのに過ぎないのかもしれない¹⁴。また、木材が不足したなら、美的環境を提供することはおそらく伐採を免れるための十分な根拠にはならないだろう。

だから、もし私がこれに代わる「非人間中心主義的価値観のプログラム」を、他ならぬ哲学の祖プラトンが提示していたことを紹介するなら、少なくとも歓迎を期待することが許されるだろう。プラトンが人間中心主義と無縁であるこ

¹¹ O'Neil (1992, p.139).

¹² Cf. Hargrove (1992, p.181).

¹³ Norton (1984; 1991), O'Neil (1992), Hargrove (1992).

¹⁴ Norton (1984; 1991) と Hargrove (1992) はともに「弱い人間中心主義」の代表的論者であるが、Norton がこのような非道具的価値を道具的価値に還元しようとしているのに対し、Hargroveがそれに反対するという仕方で議論が行われている。

とは、プロタゴラスの「万物の尺度は人間である」というテシスを「万物の尺度は神である」(Lg.¹⁵ 716c) といって喝破したことに端的に現れている。この論文のエピグラフとして掲げたMurdochの言葉にあるように「彷徨う時代精神の不可思議な宇宙的天文学のなかで」我々はプラトンのなかに地球にやさしい思想を見出すことになるだろう。

3. プラトンにとっての価値の考え方

プラトンが自然世界について価値の理論を提示していたという事実は、残念ながらあまり知られていない。実際、近年の生物学思想や環境思想の歴史の出発点近くに置かれるプラトンについての記述は「プラトンの目的は自然世界をイデアの世界に従属させることだった」というものだ¹⁶。さらに、プラトン研究者においても「プラトンの形而上学とはイデア論のことである」と断定し、プラトンが自然世界について語っていることは物語や倫理学に属する事柄にすぎないと思える伝統が存在している¹⁷。このような評価が横行するのはもちろん多くの理由があると思うが、私はここで、主要な原因の一つはプラトンの生成する世界についての価値の理論が最も明確に表明されている『ピレボス』の「今あるすべてのものの4つの分類」(23c-27c) の箇所が適切に理解されていないことである、と示唆したい。そこで本章ではまずこの箇所についてのテキスト解釈の問題を取り上げたいと思う。

この問題を解決すれば、プラトンの後期思想の中心的な課題の一つとして「非人間中心主義的価値観のプログラム」が位置づけられることが見えてくるだろ

¹⁵プラトンの対話篇の略号は Liddell&Scott (Greek-English Lexicon) にしたがっている。

¹⁶Cf. Mayr (1982, pp.304-305), Bowler (1992, p.47: 'The ultimate end of Plato's philosophy was to subordinate the world of the senses to the world of ideas.').

¹⁷Skemp (1967, p.ix) は彼以前のプラトン哲学の解釈の傾向を '[the] axiom that Forms-doctrine and metaphysic are co-extensive for Plato' と纏めたうえで、それを標的としている。なお、プラトンの自然世界についての理論は、本稿とは違った角度からのアプローチであるが、魂を主題とするこのSkempの著書とそして藤澤 (1980, pp.146-203) が、とくにソクラテス以前の哲学者たちとの影響関係に注意を払いつつ、詳細に論じており、参照されるべきだろう。本稿もこれらの著作から多大なる恩恵を受けていることをここでお断りしておく。

う。あらかじめ先取りしておく、それは次のような二つの段階からなる（この章はこの二つの段階にしたがって下位区分される）。まず第一に、プラトンは客観的価値について前章で検討された二つの議論とは別の理論を用意している。それは、すべての事物について、そこに調和状態が成立しているなら、それは（観察者の存在とは関係なしに）善きものであるというものだ。そして第二に、プラトンは我々の行為の目的が宇宙全体の調和状態にあることを示すことによって、この客観的価値の理論から独自の行為の規範を導出している。

3. 1. 客観的価値の議論：事物に見出される調和にもとづく議論

『ピレボス』解釈の問題 『ピレボス』を統一する主題は「善き生き方」が何であるかを示すことである。そのための重要な道具立てとして、プラトンは「万有のうちに今あるすべてのもの」(πάντα τὰ νῦν ὄντα ἐν τῷ παντί 23c4)を4つのクラス——(1)「無限定なもの」(τὸ ἄπειρον) (2)「限定」(τὸ πέρας) (3)「混合されたもの」(τὸ μεικτόν)そして(4)混合の「原因」(ἡ αἰτία)——に区分している¹⁸。「無限定なもの」とは「より温かい／より冷たい」「速い／遅い」などの、常に「より多くより少なく」(τὸ μᾶλλον τε καὶ ἥττον)を受け入れて「目的・終極」(τέλος 24b1)を持つことがなく「変動してとどまることがない」(προχωρεῖ καὶ οὐ μένει 24d4)ものである。「限定」には「等しい」「2倍」などが含まれ、これは変動する「無限定なもの」に混ぜ合わせられることによって「均衡と調和をつくり出す」(σύμμετρα καὶ σύμφωνα ἀπεργάζεται 25d11-e2)。この結果として生じたものが「混合されたもの」であり、プラトンは「健康」「ハーモニー」「季節」「美」「強健」などの例を挙げている。そしてこの混合をつくり出すものが「知性」(Cf. 31a8)などの「原因」である。

以上のような枠組みにはしかし、相互に密接に関連する二つの大きな解釈上の問題が潜伏している。(1)まず「混合されたもの」の事例を見れば分かるように、ここに含まれるのは「すべての美しいもの」(26b1)であり、明確に肯定的な価値を持つものである。だがもしそうであるなら、我々がふだん目にする「割れたグラス」や「虫歯」などの調和状態にない事物はどこに含まれるのだろうか？この問題に関してはふたとおりの解釈が提示されている。(a)一方の論者は

¹⁸この枠組みが快楽の分析という対話篇の重要課題に対して持つ意味については拙稿「『ピレボス』における純粋な快楽」とくにpp.31-41を参照。

「混合されたもの」に含まれる事例はたまたまどれもが肯定的な価値を持つものだったというだけで、実際はすべての事物がここに含まれると主張する¹⁹。しかし (b)他方の論者は健全でない事物を「無限定なもの」に含まれるものと看做している²⁰。当然のことながら、この問題を解決しないかぎり、ピレボスの「万有のうちに今あるすべてのもの」についての理論は、きわめて包括領域の狭いものになってしまう。(2)さらに『ポリティコス』で提示された「相互に対して計られるもの」(πρὸς ἀλλήλα)と「ある規準との関係で計られるもの」(πρὸς τὸ μέτριον)の区別(283c-285c)が『ピレボス』でなされているのかが議論されている²¹。もしある論者が主張するようにプラトンは『ポリティコス』において『ピレボス』で見落としていた区別をはじめて提示したのだとすると²²、『ピレボス』の生成する世界についての理論そのものも大幅な改訂がなされたかもしれない、やはり妥当範囲の狭い理論ということになるだろう。この二つの問題はプラトンの生成する世界についての価値の理論を再構築するに当たってどうしても避けられないものである。

(1)調和状態にない事物の問題 ここではまず日常世界にありふれた調和状態にない事物は(a)「混合されたもの」に含まれると考える論者も(b)「無限定なもの」に該当すると主張する論者も深刻な困難に直面することを示したあとで、よりテキストに整合的な別の解釈を提示することにしたい。

¹⁹Sayre (1987, pp.57-58), Benitez (1989, p.83), Hampton (1990, pp.44-45), Waterfield (1982, p.44).

²⁰Hackforth (1945, p.103; p.103 n.1), Striker (1970, p.48; pp.56-57), Moravcsik (1979, pp.95-96), Frede (1993, p.xxxv), Frede (1997, pp.187-190), Silverman (2003, p.233)など。

²¹この区別がなされていないと主張するのはStriker (1970, pp.55-57), Waterfield (1980, pp.276-280), Frede (1993, p.xxxvi), Silverman (2003, p.235; p.357 n.29)、他方ですでにこの区別が前提されていると主張するのはGosling (1975, pp.188-189; p.196), Moravcsik (1979, p.96), Frede (1997, pp.197-198), Harte (2002, p.210 n.89)である。

²²Waterfield (1980)。しかし、『ピレボス』が『ポリティコス』よりも先に書かれたということを否定する明確な理由がある。『ソピステス』『ポリティコス』という二つの対話篇が連続して書かれたことはコンセンサスが成立しているが、その『ソピステス』において緻密な検討を経た上で提示された「虚偽の問題」についての解決策が、『ピレボス』でははじめから前提されているからである。この点については拙稿『プラトンの虚偽論(2)』を参照。

解釈(a) 最初に虫歯や割れたグラスなども「混合されたもの」に含まれると主張する論者の見解を検討しよう。「混合されたもの」の例はすべて肯定的な価値を持つものだったから、この解釈をとるためにはテキストの確実な裏付けを示すことが要求される。そしてこの解釈を支持する論者たちはそのようなテキストの裏付けが少なくとも二つ見出せる、と主張する。第一に、健康や季節を生み出すものが「限定」と「無限定なもの」の「正しい組み合わせ」(ἡ ὀρθὴ κοινωνία 25e7) であるということは、「正しくない組み合わせ」の存在を含意している²³。そして第二に、快楽が「そのうちで生じるところ」(ἐν ᾧ τέ ἐστιν 31b2) である「生き物」は「混合されたもの」に同定されているが (31b-d)、当然「生き物」にはさまざまな病的な状態も含まれている²⁴。

しかしながら、第一の根拠についてはこれを明確に否定するテキストの箇所が存在している²⁵。

ソクラテス：度 (μέτρου) や均衡 (συμμέτρου) の本性を獲得していないのならば、すべての混合はどんなものであれどのような仕方であれ必ず混ぜ合わせられるものを滅ぼし、なによりもまず自分自身を滅ぼすんだ。というのも、そのようなものはそもそも混合ではなく、何か混ざり合わないまま寄せ合わせられている (ἄκρατος συμπεφορημένη) のであり、そこに含まれているものにとって、いつだって本当に不仕合わせ (συμφορά) なのだから。(64d9-e3)

「そもそも混合ではない」というこの箇所の言葉は、「限定」によって均衡や調和を与えられていないものが「混合されたもの」であることを明確に否定している。だから、虫歯や割れたグラスに調和や均衡がないとするならば、これらのものを「混合されたもの」に含めることはできない。

そして、このことを考慮すると、第二の根拠として挙げられた、調和や均衡

²³Sayre (1987, p.57), Hampton (1990, p.44-45). なお、Sayre (p.66)は、「美しく混ぜられた」(μειχθέντι καλῶς 61b8)生き方のうちに善を探し求めるという最終場面の言葉にも言及しており、この言葉は「美しくない混ぜられ方」の存在を含意していると主張する：‘This remark in itself should be sufficient to lay to rest the speculation about all members of the class of Mixture being desirable in character, based on the few examples at 26A-B.’

²⁴Waterfield (1982, p.44).

²⁵Gosling (1975, p.188), Frede (1993, xxxvi; p.79 n.2), Frede (1997, pp.194-5), Harte (2002, p. 190).

を乱した生き物も「混合されたもの」に同定できるような記述 (31b-d) はやや不正確な言い方であると考えられる。事実、この言い方は「重要なことについて最小限の言葉でできるだけ早く語る」(31d9-10)のものであり、プラトンはもう少し丁寧な分析を加えたあとで、次のように言い換えている。

ソクラテス：「無限定なもの」と「限定」から本性に即して生じた魂を持った相 (εἶδος)、それが崩壊するとき、その「崩壊」(τὴν φθοράν) が苦痛であり、それ自体の「存在」へと進む過程 (τὴν δ' εἰς τὴν αὐτῶν οὐσίαν ὁδόν)、この復帰する過程 (τὴν ἀναχώρησιν) がすべてのものの快楽である。(31a9-b4)

この箇所は「限定」と「無限定なもの」の混合からなるものが病的な状態ではなく、崩壊以前の状態 (=それ自体の「存在」) でなければならないことを示している。このように言い換えられた場合、「生き物」の事例も他のすべての事例と同様に肯定的な状態だけを示しており、最初の根拠を否定するテキストの箇所 (64d-e) と矛盾することなく読むことができる。したがって、「生き物」が「混合されたもの」であると呼べるのは、それが本来の調和状態にあるときだけだと考えるべきだろう。

解釈(b) したがって、(a)の解釈が明白にテキストに違反している以上、多くの論者は(b)を採用する道しか残されていないと考える。しかしこの場合明らかな困難として浮上するのが、「無限定なもの」の事例は「より温かい／より冷たい」「より速い／より遅い」などの性質であり、「割れたグラス」などの個物とは明らかに異質なものであることだ。この困難をどのように考えるかによって、この解釈はさらに二つの立場に分かれる。

(b-1) 一方の論者は二つの事例はまったく異なる種類のものであることを素直に認める。しかし、これは解釈上の問題ではなく、むしろプラトンの混乱あるいは理論上の欠点である²⁶。つまり、プラトンははじめこそ「より温かい／より冷たい」などの物質的要素をそれから構成される個物と区別するために「無限定なもの」として規定していたのだが、本来すべての個物が該当するはずだった「混合されたもの」を考察するときに至って急に考えを変えて、それを肯定的な価値を持つものに制限し、物質的要素と構成される個物という区別を破棄してしまう。この考えの急変によって、「無限定なもの」は物質的要素の他に、

²⁶Hackforth (1945, p.103; p.103 n.2).

もともとの規定に当てはまらない調和状態にない事物を含まねばならなくなってしまうのだとこの論者は主張する。

(b-2)しかしもちろん、プラトンが混乱していると結論づけることによって問題を解消することは、解釈者にとって最後に残された選択肢である。そこで、他方の論者は、この一見すると異なる事例を統一的に解釈することを試みる²⁷。この論者にとっては、(b-1)の解釈の過ちは「無限定なもの」を物質的要素に同定したことである。なぜなら第一に、プラトンは、調和状態がそこに生み出される対象として「鋭い／鈍い」「速い／遅い」(26a2)の他に、「病氣」(25e7)と「寒冷な気候」「茹だるような暑さ」(26a6)を挙げていて、またテキストの後半部分ではある種の快樂を感じている状態を「無限定なもの」であると述べているから(52c)、「無限定なもの」は物質的要素に限られず、ある種の個物も含んでいる²⁸。そして第二に、プラトンはテキストの少し前の部分で提示された方法論(16cff.)に言及しながら、その方法に従って「無限定なもの」を規定している(23e3-6, 25a2-4)が、この方法はイデア(およびイデアを分有する個物)に適用されるのだから、ここで問題になっているのは物質的要素ではなく、むしろイデアとそれを分有する個物でなければならない(もちろん「限定」「混合されたもの」「原因」も同様である)²⁹。したがって、「無限定なもの」とはもともとそれ自体ではいかなる決まった程度も持たないような「概念」すなわち「イデア」を指していたのであり、「割れたグラス」のような「概念」もはじめからまったく同じようにプラトンは考えていたのだと主張する(この解釈を「イデア解釈」と呼ぶことにしよう)。

しかし、仮にこの解釈が拠り所とするこの二つの論点が正しいことを認めたとしても、この論者は次の二つのことを明確に説明する必要がある。すなわち、テキストで「無限定なもの」であることが直接的に示されている事例はすべて

²⁷(b-2)の解釈は、このあとに述べるように、イデアを「生成するもの」に含めるという一見して無理のある想定をしているが、それにもかかわらず Striker (1970, pp.50-57) の影響力のあるモノグラフによって提示されて以来、Moravcsik (1979, pp.95-96), Frede (1993, p.xxxv), Frede (1997, pp. 187-190), Silverman (2003, p.233)などにそのまま継承されて、現在では最も普及した解釈となっている。この解釈を提示する直接の動機となったのが、Striker (p.48) を見れば分かるように、(b-1)解釈におけるプラトンの混乱であったことは注意してよいことだと思う。

²⁸Striker (1970, p.50; p.56), Gosling (1975, p.186), Frede (1997, p.194 n.142).

²⁹Striker (1970, pp.49-50), Frede (1997, p.206).

「より温かい／より冷たい」のように相反する性質のペアとして提示されているが、それはなぜなのかという問題と、それ自体では決まった程度を持たないような概念には「健康」や「美」などの「混合されたもの」も含まれてしまうという問題である³⁰。

第一の問題については、この論者は冠詞の付けられ方に注意を促す。すなわち、「無限定なもの」の事例として挙げられる性質のペアはそれぞれに冠詞が付けられているが(e.g. τὸ θερμότερον καὶ τὸ ψυχρότερον 24d5)、これは「より多くより少なく」(τὸ μᾶλλον τε καὶ ἥττον)という規定項目が一つしか冠詞を持たないことと較べると際だった特色である。だから、実はこの性質のペアはそれぞれが独立の「無限定なもの」なのであり、二つを並記することにはもともとあまり意味がないのだと主張する³¹。

だが、この主張は「無限定なもの」が必ず「より温かい／より冷たい」のように一組からなるという解釈に反対する一定の根拠になるかもしれないが、すべての「無限定なもの」であることが明示された事例が相反するものの並記によって書かれているのはなぜなのかという肝心の問題に対する解答にはなっていない。両者はまったく別のことである。なぜなら、我々がこの冠詞についての指摘を受け入れて、「より温かい／より冷たい」のように明確なペアではなく、「「より温かい」と「より冷たい」」と書き直し、それぞれが「無限定なもの」であると考えたとしても、これらの事例が相反するものの並記によって書かれている理由を説明する必要があることに変わりはないからである。だから、アイデア解釈は最初の問題に対して適切な解答を与えていない。

第二の問題については、この論者は「無限定なもの」に含まれる概念が「暗黙の比較」(implicit comparison)を前提としているのであり、その意味で「混合されたもの」とは異なるのだと主張する³²。この「暗黙の比較」とは、 x と y を主体、 F を「無限定なもの」に含まれる概念であるとするなら、「 x が F なら、 x は y より多く(少なく) F である」という命題として規定される。このように規定すると、

³⁰Cf. Frede (1997, p.189 n.131).

³¹Striker (1970, p.47), Waterfield (1980, p.280), Frede (1997, pp.189-190). なお、Benitez (1989, pp.70-74) が Striker の指摘は完全に正確とは言えないことを詳細に論じている。しかし、このような Benitez の議論は Striker の論点の重大性なるものをかえって誇大に宣伝する結果に終わっているように見える。実際は Striker の指摘は正しいにせよ、彼女が期待するほどの論点にはならないというのが正当な査定であると思う。

³²Striker (1970, pp.55-57), Gosling (1975, p.199).

例えば「病気」については、常に「ある人が病気であるなら、その人は別の誰かよりもより重い病気（より軽い病気）である」ことが成立するのに対し、「健康」は不健康な状態と比較することなしに絶対的に「健康」であると主張することができるから、この命題は当てはまらない。だから、「健康」を排除して「病気」だけを「無限定なもの」に含めることができるのだと主張する。

しかし、このような命題の導入はあからさまに ad hoc な解決策に過ぎない。この「暗黙の比較」の導入は「健康」を「無限定なもの」から排除することができるかもしれないが、別の事例である「美」を排除することはできない。プラトンにとって絶対的に美しいと呼べるのは＜美＞のアイデアだけであり (Cf. R. 479a-b)、個々の美しいもの (x) は他 (y) との比較においてのみ美しいと呼べるだけだからである³³。したがって、これらの論者は「美」を排除するためにまた別の命題を導入しなければならないが、そのつど ad hoc な解決策に訴えなければならないこのような解釈に説得力を見出すことはできない。

実際、この第二の問題は次のように言い換えることができる。つまり、問題となっている「美／醜」「健康／病気」などは、一見すると「温かい／冷たい」「速い／遅い」などのように相反する概念のペアであるように見えるが、実際は規範的な概念であり、肯定的な概念と否定的な概念が組み合わされている点で異なっている。そして肯定的な概念は「混合されたもの」に組み入れられてしまうから、どこまでも「より美しくなる」ことや「より健康になる」ことはありえない。「美」や「健康」は「目的・終極」(τέλος) である。そしてこのことは同時に「醜」や「病気」が軽減されていく先にこの「目的・終極」が存在することを意味している。だが、「無限定なもの」は「目的・終極を持たない」ものだったから、こうした否定的な概念を「無限定なもの」に組み入れることはできないのである。

もちろんこの事実は、アイデア解釈者たちがb-1を斥けるとときに提示していた最初の根拠と矛盾する。すなわち、「病気」(25e7)が「寒冷な気候」「茹だるような暑さ」(26a6)あるいはある種の快楽を感じている状態 (52c) とともに「無限定なもの」の一員としてテキストに表記されているという主張である。だが、テ

³³Frede (1997 p.195 n.144) は、プラトンは健康状態について健康を規準として、そこからどれだけ多く（少なく）病気であるかという語り方しか認めないのだとして、ad hocな命題を導入する必要はないと考える。しかし、このFredeの主張を「美しいもの」に適用すると、プラトンは二つのものの美しさを較べるときに、一方が「より多く醜い」のに対し他方は「より少なく醜い」という言い方しか認めず、「より美しい」という言い方を排除するという奇妙な帰結が生じる。

クストを詳しく見れば、この主張は正しくないことが分かるだろう。まず、最初の二つについてプラトンは次のように書いている。

A1 （「無限定なもの」と「限定」との正しい組み合わせが）「病氣」のうちに「健康」を生み出す。(25e7-8)

A2 「鋭い／鈍い」「速い／遅い」——これらは「無限定なもの」なのだが——のうちにもっとも完全な音楽を生み出す。(26a2-4)

A3 「寒冷な氣候」「茹だるような暑さ」のうちに、「多すぎる」と「無限定なもの」を取り除いて、季節を生み出す。(26a6-b1)

この三つの組で誤解の余地がなく「無限定なもの」と呼べるのは、すでに「より速い／より遅い」(25c9)という事例が言及されていた**A2**の例であるのに、この事例にだけ「無限定なもの」であるという断り書きがついており、他の二つの事例にはついていない。もし「病氣」が「無限定なもの」に含まれるのなら、我々は最初に挙げられたこの異端児にこそ断り書きがついていることを期待するはずである。だから、このテキストの記述の仕方はかえって「病氣」そのものは「無限定なもの」ではないという可能性を強く示唆する。

また、**A3**に挙げられている事例が「無限定なもの」であると看做すべき理由もない。さらに52cにおいても、「無限定なもの」に帰属するものが「快楽を感じている状態」を指しているとは書かれていない。それどころか、そのように考えてはいけないう明確な理由が存在している。それはつまり、快楽を感じている状態であれば、快楽は崩壊状態からの回復として規定されるために (Cf. 32b2-4)、身体が完全に回復したときに「目的・終極」に辿りついてしまい、「無限定なもの」の規定に違反してしまうことである³⁴。だから、ここで述べられている快楽は身体的状態ではなく、快楽そのものでなければならない。したがって、「無限定なもの」が物質的要素ではなく、個物や個々の状態を指すという主張には根拠は存在しないのである。

要するに、仮にこの解釈の主張するように「無限定なもの」がアイデアとそれを分有するものであると認めたとしても、「無限定なもの」と「病氣」などの否定的概念を統一的に解釈することは失敗していると考えなくてはならない。

それだけでなく、もともとこのアイデア解釈の出発点は調和状態にない事物の

³⁴この点については拙稿「『ピレボス』における純粋な快楽」pp.31ff.を参照のこと。

位置づけであったことを考慮すると³⁵、この説明に失敗していることは、イデア解釈を採用する重要な根拠を失うことを意味する。実際、この箇所で規定される4つの区分をイデアの分類と考えることにはいくつもの大きな困難が立ちはだかっている³⁶。第一に、ここで区分されるのは「万有に今あるすべてのもの」(πάντα τὰ νῦν ὄντα ἐν τῷ παντί 23c4)だが、「今」や「万有にある」という言葉は区分の対象が生成世界であることを強く示唆する。たしかに、多くの論者が指摘するように³⁷、「今」という言葉に過去や未来との対比を見出すことは読み込みすぎであると反論があるかもしれないが、「万有にある」という言葉はイデアに該当しない。プラトンにとってイデアとは万有のなかにあるものではなく、万有あるいは場所を超越したところにあるものである(Cf. *Phdr.* 247c3, *Ti.* 50b5ff.)³⁸。第二に、「原因」が働きかけることによって「無限定なもの」と「限定」から「混合されたもの」が生成するという構造は、「生成も消滅もしないイデア」(15b3-4)に当てはまらないことは明白である。第三に、プラトンはテキストの終わりのほうでイデアを「恒常不変で混合することのないもの」(59c3-4)と呼んでいる。「混合することのない」という表現がイデアに付けられていることは、4つの区分において「混合される」という観点で「原因」以外のものが規定されていることを強く意識した表現だろう。だから、この4つの区分の箇所はイデアの記述として奇妙であるだけでなく、端的にそれを否定する言葉を含んでいるのである³⁹。

こうした明らかな困難に対して、イデア解釈者たちは方法論の問題に注意を喚起する(イデア解釈者がb-1の解釈を斥けた二つめの根拠)。プラトンの方法論はイデアを類概念と種概念に分類するものであったから、この方法が適用され

³⁵Cf. n. 27

³⁶とくにBenitez (1989, pp.81-83)が中期対話篇におけるイデアとの関係を念頭において詳しく論じている。

³⁷Cf. Striker (1970, p.77), Frede (1997, p.185), etc.

³⁸Cf. Benitez (1989, p.68).

³⁹イデア解釈者たちはこれに対して、プラトンは極度に不透明な比喻を使っているとして問題を回避するか(Moravcsik (1975, p.98))、あるいはイデアは外延(イデアを分有する個物の集合)と内包(イデアとしてのイデア)とのあいだで曖昧な概念であり、外延としては「生成するもの」だが内包としては「恒常不変」である等々と回答する(Cf. Striker (1970, pp. 31-40, 63-64), Frede (1997, pp.205-211))。私はどちらの回答もまったく説得力がないと考える。

ていることはそれ自体で4つの区分をイデアであると看做す十分な根拠である、と⁴⁰。しかし、ここで詳しく論じる余裕はないが、プラトンの方法論——これはイデア解釈者たちも認めるようにプラトン後期思想で主要な位置を占める哲学的問答法 (διαλεκτική) と同一のものである——には少なくともふたとおりの解釈が存在し、イデアを類概念と種概念とに分類する方法の他に、生成する世界に見られる個物 (あるいは個々の性質) の分類を通じてイデアの発見に至る方法として理解する道が残されている⁴¹。後者の解釈にしたがうなら、ここで分類されているのは生成する世界に見られる個物あるいは個物を構成する要素であり、上に見られるような明らかな困難はすべて回避することができる。

別の解釈 以上の議論から、調和状態にない事物の位置づけに関して、(b-2)のように多くの明らかな矛盾を抱えながら対象領域をイデアを含むように拡大しても何ら助けにならないこと、だからやはりスコープは生成する世界に限定すべきであるが、従来の(a)や(b-1)の解釈ではこの説明に成功していないことが論証できたと思う。私はこれから別の解釈を提示するが、まず(a)や(b-1)の解釈のどこが間違っていたのかを指摘しておきたい。これらの解釈の最大の誤謬は「原因」の働きかけが瞬時に起こるものと想定していることである。この想定の不合理性は「原因」の一つである人間の知性の働きを考慮すれば明らかになる。(a)の場合、「原因」の働きかけは「無限定なもの」が生成する世界における事物となる瞬間に起こると想定されている。しかし、もしそうであるなら、ここに人間の知性が介在する余地はなくなってしまう⁴²。そして(b-1)の場合、「病氣」

⁴⁰方法論がイデアを類概念と種概念に分割することを指示しているという解釈を採用するかぎり、解釈者は(a)イデアが「生成するもの」であると記述されていることを認めるか、(b)ここで方法が適用されていることを否定するか (Benitez (1989, p.65) は 'parody' であるとする) の二者択一に迫られる。もしどちらの選択肢もきわめて不自然であると感じたら、方法論の解釈が間違っている可能性を第一に考慮すべきである。

⁴¹διαλεκτική を「類となるイデアを多くの種となるイデアへと分割することによって、イデア界の構造を把握する方法」として解釈する論者は Cornford (1935, pp.186-187), Moravcsik (1973a, b) などであり、「生成する世界の分類を通じてイデアの理解に到達しようとする方法」として解釈するのは Cherniss (1944, pp.46-48), Bluck (1975, p.40), 小池 (1982, p.60)。

⁴²(a)の解釈にしたがうと、人間の知性が介在するのはむしろ「病氣」などの悪い「混合されたもの」を「健康」などの良い「混合されたもの」にもたらしことになるだ

が非常に軽いものか致命的なものであるかに関わりなく、「原因」は瞬時にそれを「健康」にもたらすと想定されている。しかし、人間の知性はそのような奇跡を成し遂げることはできない。

テキストが告げているのはそういうことではなく、むしろ「原因」の働きかけが起こるのはある種の「過程」においてであるということだ。このことは4つの存在論的区分が原因の規定 (26e-27c) において次のような関係に位置づけられることから導き出せる⁴³。全体の枠組みは「作成」(ποιεῖν) という場面に置き直され、「原因」は「作るもの」(τὸ ποιοῦν 26e6; δημιουργοῦν 27b1) に、そして「無限定なもの」と「限定」と「混合されたもの」は「作られるもの／生成するもの」(τὸ ποιούμενον 27a1; τὸ γιγνόμενον 27a1) およびその「素材」(ἐξ ὧν γίγνεται 27a11) に同定される。ただし「混合されたもの」はすでに指摘したように (p.53) 調和状態が現に成立している状態であり、またすぐ後に「生成した存在」(γεγεννημένην οὐσίαν 27b8) と呼ばれているから、これは作られつつあるものではなく、作られて完成したものであることに注意しなければならない。そして、この過程は全体として「生成」(γένεσις 27a9; Cf. 27b9) または「混合」(μείξις 27b9) と呼ばれるから、「原因」の働きが行われる過程は次のように定式化される。

B 作成過程 (=生成／混合) → 完成したもの (=生成した存在／混合されたもの)

また、テキストの後半部(53d3-54c5)で、この「生成」と「存在」はそれぞれ「何かのためにあるもの」(τὸ ἔνεκα τοῦ 53e5) と「何かのためにあるものがそのためにあるもの」(τὸ οὐ χάριν ἐκάστοτε τὸ τινὸς ἔνεκα γιγνόμενον 53e6) すなわち「手段」と「目的」という関係としてとらえなおされる。この「作成過程」の存在に気づくことによって、我々はプラトンが変化の過程を「目的」を持たない「無限定なもの」の変動と「目的」を持つ作成過程との二つに区分していたことを理解するのである。

具体的な二つの例について考えてみよう。最初は問題となっていた「病氣」の例である。これは回復することによって「健康」になるのだから、次のよう

ろうが、それはテキストで述べられている「原因」の働きではない。

⁴³より詳細なテキストの分析は拙稿「『ピレボス』における純粋な快樂」pp.27-8を参照。

な「目的」を持つ過程に位置づけられる⁴⁴。

B1 病気の回復過程（生成） → 健康（存在／目的）

プラトンの時代においては人間の健康状態は温冷乾湿という4つの要素のバランスから成り立つとされていた (Cf. *Smp.* 188a-b)。この理論を『ピレボス』の解釈に援用すると、**B1**の過程において素材となるものは「より温かい／より冷たい」「より乾いた／より湿った」という2組の「無限定なもの」であり、それが「限定」によって縛り付けられることによって「健康」が成立する。ここで、程度の差異が生じる原因には次の二通りの可能性が考えられるだろう。一つめは「限定」が徐々に縛り付ける力を強めていき、最終的にしっかりと混合することであり（強度の差）、二つめは、2組の要素は実際はそれぞれがたくさん存在するのであって、「限定」は縛り付ける量を徐々に増やしていき、最終的にすべてのものを縛り付けるというものである（量の差）。プラトンがどちらの可能性を考えていたのかは分からないが、どちらにしても縛り付けが完全でない要素が少なくとも2組介在することによって、病的な状態はさまざまな症状として現れることになる。そして、もしこの状態を4つの分類のどこかに強いて振り分けるべきであるなら、「混ざり合わない寄せ合わせ」(64e1)として、それを構成する「無限定なもの」と「限定」に還元されると看做すべきだろう。

二つめの例は「生成」と「存在」を「手段」と「目的」の関係に位置づけるときに言及される「造船」と「船」である (55b1-4)。

B2 造船（＝生成） → 完成した船（＝存在）

この例が「病気」の例と異なっているのは、建造中の船もやはり「船」であり、それ自体のネガティブな呼称を持たないということである。しかし、このこと

⁴⁴もちろんこれと相関的な崩壊過程も存在するが、本稿では生成過程のみ定式化しておけば十分であろう。崩壊過程は技術が原因とならないなどいくつかの重要なポイントを含むが、プラトン自身「4つの存在論的区分」において崩壊の原因となるものに言及しつつも想定を保留しており (23d9-e2) 具体的な構造を示していない。この理由は、2種類の原因を導入することによる不要な混乱を避けたかったという単純なものではなく、この崩壊状態の原因を「身体的要素」(Cf. *Ph.* 269d5ff, *Ti.* 46c7-e6) に求めるか「無知なる魂」(Cf. *Lg.* 896d5-e6) に求めるかというプラトン最晩年の問題にも関わっているだろう。

に惑わされて、「船」はいつでも「混合されたもの」に帰属すると考えてはならない。この例は名前がたまたま一緒であるだけで、実際の状態においては「病氣」と「健康」と同様、「完成していない船」と「完成した船」とのあいだに厳然とした存在論的区分の境界が存在している。だから、未完成の船も逆に壊れている船もそれが「船」としての機能を果たさないかぎり、木材を構成する要素の「寄せ合わせ」以上のものではないのである。

以上をまとめるなら、問題となっていた調和状態にない事物は、その事物としては4つの存在論的身分のどこにも含まれず、たんなる「寄せ合わせ」として素材レベルで「無限定なもの」と「限定」とに解消されることになる。しかし同時に、それぞれのものはある過程のうちに位置づけられ、完成状態との関係でその規定を与えられていることは重要である。なぜなら、このことはすべての事物が規範的な領域に含まれていることを示しており、その事物が位置づけられる過程を支配する原因あるいは知性が介在することによって、完成状態へともたらされる可能性を常に残していることになるからである。

(2)『ポリティコス』との関係の問題　そしてまた『ポリティコス』との関係について提示されていた問題も実質的に同じ仕方で解決できる。そもそもここに問題があるとされていたのは、次のような思考による。「無限定なもの」は「過度に」(τὸ λίαν 24e8) という規準を超過した状態を含んでおり、「混合されたもの」に帰属する「季節」は「寒冷な気候／茹だるような暑さ」(26a6-b1)という、まさしく規準を逸脱した「無限定なもの」が素材となって生じると書かれている。しかし、このような規準から逸脱した状態から美しいものができるというのは奇妙である。「季節」を作り出すのはむしろ「寒い気候／暖かい気候」だろう。さらに、別の「混合されたもの」である「魂における美しいもの」(ἐν ψυχῇ πάγκαλα 26b6-7) にはお金に対する正しい態度というものが含まれるだろうが、これの素材となる「無限定なもの」を規準を超過した状態として考えるなら、「吝嗇／浪費」というペアが考えられなければならない。しかしそれも奇妙であり、むしろここで素材となるのは「儉約／気前のよさ」だろう。他方でプラトンは『ポリティコス』(283c-285c) で「相互に対して計られるもの」(πρὸς ἀλλήλα) と「ある規準との関係で計られるもの」(πρὸς τὸ μέτριον) との区別を提示しているが、これはまさしくこの2種類の「無限定なもの」を区別する指標となりうるのであり、したがって『ピレボス』における存在論的枠組みはこの区別とともに改善されたのである。

このような解釈は「寒冷な気候／茹だるような暑さ」や「吝嗇／浪費」を「無

限定なもの」として想定する点で誤っている。念のため「季節」についても生成過程を定式化しておこう。

B3 季節の生成過程 (=混合) → 季節 (=存在/混合されたもの)

もはや明らかだと思うが、「季節」は「混合されたもの」だから、生成途上の状態が存在していなくてはならない。そして未完成状態に含まれるさまざまな「無限定なもの」のうち「温かい/冷たい」という要素の縛り付けが不完全で「過度に」熱くなっているときに「茹だるような暑さ」が、「過度に」冷たくなっているときに「寒冷な気候」がそれぞれ成立していると考えればよいのである。すでに述べたように (p. 58) この二つの逸脱した気候をそのまま「無限定なもの」と看做すべきテクスト的根拠は存在しない。また、お金に関する正しい態度についても同じように説明できるだろう。「無限定なもの」はもともと規範的概念ではない。それが、特定の生成過程に導入されるときに、その過程が持つ目的との関係で規範的な意味合いを持つのである。

実際のところ『ポリティコス』(283c-285c) は生成する世界における客観的価値の理論の表明において完全に『ピレボス』と唱和している。この箇所では「すべての生成するものに関わる」(περὶ πάντα τὰ γινόμενα 285a2) 計測術が「大と小の互いに対しての共通性にそくした部分」(τὸ μὲν κατὰ τὴν πρὸς ἄλληλα μεγέθους καὶ σμικρότητος κοινωνίαν 283d7-8) と「生成に必要な存在にそくした部分」(τὸ κατὰ τὴν τῆς γενέσεως ἀναγκαίαν οὐσίαν 283d8-9) に区別される。前者は数や大きさ、深さ、幅、速度などについて相互比較を行うものであり、後者は規準(適度、相応、時宜、必要など)に照らし合わせて手元にあるものを判断する技術である(284e4-7)。プラトンが重要視するのは規準に対しての比較であり、この規準との関係で言論および行為における我々の良し悪しが決定されるのみならず(283e3-6)、すべての技術は「規準を救い出すことによって、すべての美しいものおよび善きものを作り出す」(τὸ μέτρον σώζουσαι πάντα ἀγαθὰ καὶ καλὰ ἀπεργάζονται 284b1-2) ものとして、規準の存在と相即不離の関係にある。『ピレボス』においては、「原因」あるいは「知性」が「限定」を導入することによって「均衡と調和」(σύμμετρα καὶ σύμφωνα 25e1) を作り出し「すべての美しいもの」(ὅσα καλὰ πάντα 26b1-2) を生み出すと論じられていた。また、「生成」と「存在」の関係を論じる箇所ではこれらのものが「美しい」だけでなく「善きもの」でもあることがはっきりと表明されている。

ソクラテス：何かのために生じるものが常にそのために生じるもの [=存在]、それは善の部分に含まれる。だが、何かのために生じるものはその他の部分に含まれると看做さなければならない。(Phlb. 54c9-11)

だから、二つの対話篇は、すべての生成する事物について、それを対象とする技術が存在していること、そしてその技術は基準を確保することによって均衡と調和を作り出すこと、そして完成したものが美しく善きものであること、という価値の理論を提示しているのである。この理論はもちろん人間や意識する主体の存在に関係なく成立するから、我々はこれをプラトンの客観的価値の理論と呼ぶことができるだろう。

ちなみに、このような構造の相同性にもとづけば、「生成に必要な存在にそくしての計測術」という言葉は難解ではあるが、ある作成過程にとってその規準として必要な「完成したもの」 (=存在) との関係で計測を行う技術というような意味に理解できると思われる⁴⁵。

その他の対話篇 以上の議論によって、プラトンが生成する世界に見出されるあらゆるものについて、そこに「均衡と調和」が成立しているならば、それは善きものであり、客観的な価値を持つという理論を提示していることが確認できたと思う。ただし、このような技術によって生み出される「調和」あるいは「秩序」(Cf. τάξις Phlb. 26b10⁴⁶)によって価値を説明する理論はなにも『ポリティ

⁴⁵Lafrance (1995, pp.96-97) はこの言葉のなかに現れる οὐσίαν を、次のような三つの定式の類似性から「尺度」(μετρίον) であると解釈する。

C1 κατὰ τὴν τῆς γενέσεως ἀναγκαίαν οὐσίαν (283d8-9)

C2 πρὸς τὴν τοῦ μετρίου γένεσιν (284c1)

C3 πρὸς τὴν τοῦ μετρίου γένεσιν (284c1)

しかし、第一にそもそも C1 と C2, C3 では前置詞が違うこと、そして第二に C2, C3 は πρὸς τὸ μετρίον (283e11, 184a2, 284e6) とともに πρὸς ἄλληλα と対立的に用いられるが、C1 はそのうちに πρὸς ἄλληλα をすでに含む κατὰ τὴν πρὸς ἄλληλα μεγέθους καὶ σμικρότητος κοινωνίαν (283d7-8) と対比的に用いられていること、この二つの点を考慮すると、Lafrance の主張する「類似性」は明らかに不十分である。

⁴⁶Striker (1970, p.61) が主張するように「法と秩序」は「等しい」「2倍」などが例である「限定」に同定するよりも、「調和や均衡」とともに「限定」が作り出すものに同定すべきである。したがって、26b10における OCT の πέρας ἔχοντι(α) (T写本) は

コス』や『ピレボス』といった後期思想においてはじめて提示されたものではない⁴⁷。プラトンはすでに初期対話篇の一つである『ゴルギアス』(503d-504e)において、技術と秩序との関係について言及している。そこではまず肖像画家、家大工、船大工などの職人 (δημιουργος) について、彼らの目的は自分たちの作品を秩序あるもの (τεταγμένον τε καὶ κεκοσμημένον πρᾶγμα 504a2) に仕上げることでであると述べられる。秩序が成立すれば作品は善きものとなり、無秩序であれば作品は悪いものである。次に、医者や体育教師によって作られる身体における秩序として「健康」と「強健」が挙げられている。最後に魂における秩序は「正義」や「思慮」であるとされ、真の弁論家によって作られる可能性が言及される。

しかし、この時点ではプラトンの焦点が当てられるのは人間の技術とその対象に限られている。これが生成する世界全体へと拡大されるためには、『ソピステス』において作り出す技術が「それ以前には存在しないものが以後に生じるための原因となる能力」(δύναμιν ἣτις ἂν αἰτία γίγνηται τοῖς μὴ πρότερον οὖσιν ὕστερον γίγνεσθαι 265b9-10; Cf.219b4-5) として広く規定されつつ、動植物から魂を持たない地中の鉱物⁴⁸に至るまであらゆる事物が、神の持つ「作り出す技術」の対象として把握されることによって、まさに万有のレベルで価値の原理とされるのを待たねばならなかった⁴⁹。しばしば退屈な読み物とされる『ソピステス』で行われる技術の諸相の分析——それは『ポリティコス』においても引き継がれるのだが——の持つ意味の一端はまさしくこの「作り出す技術」

Striker, Frede(1997)とともに πέρας ἔχόντων (B写本)に改める。

⁴⁷Skemp (1960, p.29) は『ピレボス』における γεγεννημένη οὐσία (the object) および γένεσις εἰς οὐσίαν (the creation) という規定をNatorpの言葉 ('Es ist sehr zu beachten, dass hiermit, zum ersten Mal in dieser Deutlichkeit, das Werden einen ganz positiven Sinn erlangt') を引用しつつ、a new valuation of the natural order としている。たしかに明確な存在論的区別をともなった生成の理論としては『ピレボス』における規定は画期的なものであるかもしれないが、しかし以下に述べるように、生成するものに肯定的な価値を見出すこと自体はプラトンの思想においてすでに初期から見られるものである。

⁴⁸ἐν γῇ σώματα τηκτὰ καὶ ἄτηκτα (265c3). Campbell (1867, p.183) は、'i.e. Metals and other minerals' と注記している。

⁴⁹この「作り出す技術」の規定はすでに『饗宴』205bに類似の規定が提示されているが、その箇所では『ソピステス』におけるような「神の作り出す技術」は視野に入れられていない。事実『国家』10巻597bにおいては、神は「寝椅子のイデア」の制作者として、職人の制作の技術とは完全に切り離された次元で把握されている。

が技術全体において持つ位置を確かめることにあったと思われる。

それからまた『パイドン』(97c-99d) において語られる、ソクラテスがアナクサゴラスの書物のなかに「宇宙が知性によって秩序づけられている」という理論を探し求めながらも見出すことができなかったという逸話は、そのまま後期思想におけるプラトン自身の探求の道筋を示しており、我々が検討した「作成される自然世界」というアイデアを明確に打ち出した後に⁵⁰『ティマイオス』において集大成される。ここで提示される作成過程とは、創造主 (δημιουργός) がでたらめにそして無秩序に運動している (κινούμενον πλημμελῶς καὶ ἀτάκτως 30a4-5) 目に見えるすべてのものを受け取って、永遠なるアイデアをモデルとしつつ、各部分ならびに全体に「秩序」(τάξις 30a5) や「調和」(συμμετρία 69b4) を生み出すことによって、宇宙をもっとも善く、もっとも美しく、もっとも完全な (ἄριστος κάλλιστός τε καὶ τελεώτατος 92c8) ものに仕上げる、というものである。

だから、「自然世界は技術によって作られるものであり、そこに秩序や調和が成立しているときにそれが客観的価値を持つ」という理論はプラトン哲学の中心的な主題の一つを形成していると言うことができるだろう。

このプラトンの客観的価値の理論を、我々が検討した現代の環境倫理学の議

⁵⁰『ティマイオス』は『ソピステス』および『ポリティコス』より後の対話篇であると考えられる。さらに『ピレボス』よりも後の対話篇であると考えられるべき重要な二つの根拠がある。それは第一に、「知覚なしの状態」(ἀναισθησία) という名詞とそれを形容詞化した「知覚されない」(ἀναισθητός) という言葉の使われ方に見られる。つまり「知覚なしの状態」という言葉は『ピレボス』34aで新しい術語として「忘却」(λήθη) と区別するために導入され、後に(51b5)その規定と関連して形容詞化した「知覚されない」という言葉が用いられるのであるが、プラトンがこれらの言葉を使うその他の作品は『ティマイオス』(名詞が2回: 52a, 74e、形容詞が8回: 51d, 51e, 64a, 64b, 64c, 65a, 67d, 75e)と『法律』(形容詞が3回: 843a, 898d, 962b)だけであり、しかもこれら二つの対話篇においては説明抜きで用いられている。だから、プラトンが『ピレボス』でこの言葉を規定し、それから後に断りなく用いるようになったと考えるのが自然だろう。第二のそしてより重要な根拠は、快も苦もない状態のとらえ方に見られる。これは『国家』583e-584aにおいては静止状態であると規定されていた。『ピレボス』32d9-33a2では最初『国家』と一致する「崩壊も回復もしていない状態」(=静止状態)として規定されるが、プロタルコスがヘラクレイトス説を持ち出すことによって静止状態の存在を否定するので、ソクラテスはこれを「小さな変化しか起きていない状態」に改定しなくてはならなくなる (42c5-43d3; Cf. 拙稿「『ピレボス』における純粋な快楽」pp. 23-28)。他方で、『ティマイオス』64c7-d3ははじめてから『ピレボス』における改定後の規定を採用している。

論と比較すると、生物だけでなく無生物についてもまったく同じ仕方で規範的な領域に位置づけている点で、環境倫理学における議論が包括できなかった「地球温暖化」や「土壌汚染」の問題も射程距離におくという利点を持つ。「気候」は「健康状態」と同じく、そこに調和状態が成立しているときに「善きもの」と呼べるからである。他方で、環境倫理学において提示されていた議論と同様に、人間だけでなく人間の食料とされる動植物や天然痘ウィルスにも（調和状態にあるかぎり）価値を認めているために、プラトンの理論も天然痘ウィルスを撲滅する試みが多くの価値を破壊することにつながるという奇妙な帰結を導くように見える。「非人間中心主義的価値観のプログラム」を完成させるためには、(b)客観的価値の理論から我々の肯定できる(a)行為の規範を導かなければならなかった。しかし、プラトンの理論はそのような問題を乗り越える道をきちんと持っている。その道とは「万有の調和」の思想が示すものである。

3. 2. 万有の調和

プラトンの「万有の調和」の思想とは、一言で要約すれば、個々の部分から全体にパースペクティヴを転換することによって、全体の善すなわち調和状態を我々の行為の規範として課するものである。環境倫理学において一つの提案として提示された、個々の価値を加算していくことによる善の最大化は、価値の比較計算の方法を明確にしないかぎり実行不可能であるという困難があった。それとは対照的に、プラトンの理論ではそのような計算ははじめから不要である。だが、プラトンの理論から具体的にどのような地球にやさしい行為の規範を導き出せるのかを考える前に、プラトンが「万有の調和」の思想を提示している『法律』——おそらくプラトン最後の著作——の該当箇所を見ておくことにしよう。

ここでは、神に対する不信心が重大な犯罪として糾弾されているが、ある不信心な若者は「神はたしかに存在するが、人間に配慮しない」といって自らの立場を擁護しようとする。対話の主導者であるアテナイからの客人は、議論によってこの主張を論駁したあとで、若者を納得させるためのミュートスを付け加える。それは次のようにして語りはじめられる。

(a)万有を配慮するものによって、すべてのものは全体の保全と卓越性を目指して秩序づけられており、その部分もまたそれぞれが能力に応じてふさわしい作用を受けたり作用を惹き起こしたりしている。

(b)そしてこのそれぞれの部分には、作用を受けたり惹き起こしたりすることの最小の部

分に至るまで定められた管轄者が存在しているのであり、彼らは部分としての極限に至るまで終極・目的(τέλος)をつくり出した上で⁵¹、それぞれの部分に関わっているのだ。

(c)強情な君という部分もまた、どれほど小さいものであろうとも、そのような部分の一つとして、全体へ目を向けてそこに寄与しているのである。しかし、君はまさにこのことに気づいていないのだ。すなわち、すべての生成 (πάσα γένεσις) はかのもののために (ἐνεκα ἐκείνου)、つまり万有の生に幸福なる存在 (εὐδαίμων οὐσία) が備わるようにと生成しているのだということを。生成は君のために行われているのではなく、君が万有のために生成しているのだ。というのも、どの医者もどの技術を持った職人もあらゆる種類のもののためにすべてのことを行っているのだけれども、共通の最善を目指すものとして部分を全体のために作るのであって、部分のために全体を作るのではないからだ。ところが君は、共通の生成の能力にもとづいて (κατὰ δύναμιν τὴν τῆς κοινῆς γενέσεως)、万有にとって最善となるような君に関することがらは、君にとっても最善になるということを知らないで、嘆いている。(903b4-d3)

我々が前章で考察したようなプラトンの価値の理論を背景に考えるならば、このパッセージは次のように解釈できるだろう。まず(a)において、すべての生成する事物が全体の善との関係で規範的領域におかれていること、そして全体を配慮する神が存在していることが述べられる。次に(b)において、それぞれの生成する事物についても、制作者としての神および人間が管轄者として関わっており、それぞれが目指すべき調和状態を設定した上で、その目的へと生成するように配慮していることが付け加えられる。しかし(c)において、すべての生成する事物の調和状態が一様に追求されるべきではなく、むしろすべての事物に関わる「生成」は万有の「幸福なる存在」という統一的な目的を持っていることが明らかにされる。ここで「生成」と「存在」が「手段」と「目的」の関係におかれていることは明らかに『ピレボス』の「あるものの4つの分類」の箇所を念頭においた記述である。だから、プラトンは次のような生成過程をこれまでに挙げられてきた過程と類比的なものとして提示していることになるだろう。

⁵¹ τέλος ἀπειργασμένοι はEngland (1921, pp.490-491) の 'have achieved perfection' という訳ではなく、Englandが別の案として紹介している Ritterの 'having had arranged for them the end for which they must strive' にしたがう。すでにperfectionを達成してしまっていたら、今まさに生成が目的を目指して行われているということが理解不能になってしまうだろう。

B4 すべての生成過程（＝生成） → 万有の幸福（＝存在／目的）

この万有の幸福は『法律』においては「徳の勝利と悪徳の敗北」(904b4-5) と言ひ換えられるだけだが、その内実は『ピレボス』における人間と万有とに共通の善き生き方の描像——そこではすべての要素の完全な調和状態が実現されている——に見ることができるものである(63e7-64a3)。

では、どのようにすれば我々は万有の幸福に寄与できるのだろうか？プラトンのこの後の記述は独自のエスカトロロジーの観点から、我々の魂の善き行為は必ず報われ、悪しき行為は必ず罰せられることを告げるだけである。そこで、本稿の締めくくりとして、少しだけ思弁を働かせてみて、環境問題を主題とした場合に、プラトンならどのような行動の規範を提示するかを考えてみることにしよう。

プラトンにとって技術とは本質的に「適度」や「調和」に常に注意を払うものであった。そして技術の基本的な相として対象に調和状態をもたらす「作り出す技術」というものが存在していた。さらに『ポリティコス』においては「理論的な技術」の重要な下位区分として「管理する技術」というものが言及されている(260b3)。このグループに帰属する技術もまた対象に調和状態をもたらすものに含められるだろう。もちろん、技術はすべてのものがこうした対象の善を目的とするわけではない。「作り出す技術」と対比される「獲得する技術」はいかにうまく対象を獲得するかということにその技術の本質的な特色があるのであり、だから例えば魚釣りの技術は、魚の善を目的とするのではなく、魚を捕らえるための最善の条件を追求する。しかし、「作り出す技術」と「管理する技術」の両方を合わせれば、人間が関わる自然環境はすべてその調和状態を目指すための対象として包括できることは間違いない。このような技術の理解を背景として、おそらくプラトンはそれぞれの自然を管理するための最高の専門家を養成することをまず第一に推奨するのではないかと思われる。それぞれの自然が適切な管理者を持たなければ、自然が調和状態にもたらされることはたんなる理論的可能性に過ぎないからだ。しかし、プラトンの技術に対する要求は厳しいから、誰もがこのような管理者になれるわけではないし、多少の成功で満足してはならない。完全な調和状態を実現するまで「知」の追求を休めてはならないのである。だから、ひょっとしたらプラトンは、たんなる管理者ではなく、哲人管理者でなくてはならないと付け加えるかもしれない。もちろん「万有の調和」の思想は、個々の自然の調和ではなく万有の調和を唯一の目的とするけれども、基本的に森林や土地やある地域の大気といった大きな領

域でとらえられた個々の自然の調和状態は世界全体の調和状態に寄与するのであって、すべての自然が同時に完全な調和状態になることができないことが判明しないかぎり、この調和状態を追求していくことが我々の責務となるだろう。そして専門家以外の人々はもちろん専門家の意見に従って世界全体の調和を目指すよう努力しなければならない。

以上がさしあたってプラトンの思想から引き出せる環境倫理学へのメッセージである。もちろん環境問題に対してプラトンが実際にどのように反応するかということは我々の想像の域を出ることはないが、独自の「非人間中心主義的価値観のプログラム」を提唱していた思想家としてプラトンを「地球にやさしい哲学者」と呼ぶことができることは間違いないと思われる。

(京都大学・博士課程・日本学術振興会特別研究員)

文献表

- Benitez, E. E. (1989) *Forms in Plato's Philebus*. (Assen).
- Bowler, P. (1992) *The Earth Encompassed: A History of the Environmental Sciences*. (New York).
- Bluck, R. S. (1975) *Plato's Sophist. A Commentary and Introduction*, ed. Gordon C. Neal. (Manchester).
- Campbell, L. (1867) *The Sophistes and Politicus of Plato*. (Oxford).
- Chemiss, H. F. (1944) *Aristotle's Criticism of Plato and the Academy*. (Baltimore).
- Cornford, F. M. (1935) *Plato's Theory of Knowledge*. (London).
- England, E. B. (1921) *The Laws of Plato*. (Manchester).
- Frede, D. (1993) *Plato. Philebus*. (Indianapolis).
- Frede, D. (1997) *Platon, Philebos. Übersetzung und Kommentar (Platon. Werke, III 2)*. (Göttingen).
- Gosling, G. C. B. (1984) *Plato: Philebus, Translated with Notes and Commentary*. (Oxford).
- Hackforth, R. (1954) *Plato's Examination of Pleasure, A Translation of the Philebus, with Introduction and Commentary*. (Cambridge).
- Hampton, C. (1990) *Pleasure, Knowledge, and Being: An Analysis of Plato's Philebus*. (Albany).

- Hargrove, E. (1992) "Weak Anthropocentric Intrinsic Value," *The Monist* 75; reprinted in Light & Rolston (2003), pp.175-190.
- Harte, V. (2002) *Plato on Parts and Wholes*. (Oxford).
- Lafrance, Y. (1995) "Métrétique, Mathématiques et Dialectique en *Politique* 283c-285c," in *Reading the Statesman: Proceedings of the III Symposium Platonicum*, ed. C. J. Rowe (Sankt Agustin), pp.89-101.
- Lee, K. (1996) "Source and Locus of Intrinsic Value: A Reexamination," *Environmental Ethics* 18; reprinted in Light & Rolston (2003), pp.154-162.
- Light, A. & Rolston, H. III (2003) *Environmental Ethics: An Anthology*. (Blackwell).
- Mayre, E. (1992) *The Growth of Biological Thought: Diversity, Evolution, and Inheritance*. (Harvard).
- Moravcsik, J. M. E. (1973a) "Plato's Method of Division," in *Patterns in Plato's Thought*, ed. J. M. Moravcsik (Boston and Dordrecht), pp.158-180.
- Moravcsik, J. M. E. (1973b) "The Anatomy of Plato's Divisions," in *Exegesis and Argument*, ed. E. N. Lee, A. P. D. Mourelatos, and R. Rorty (Assen), pp.324-348.
- Moravcsik, J. M. E. (1979) "Forms, Nature, and the Good in the *Philebus*," *Phronesis* 24, pp.81-104.
- Murdoch, I. (1992) *Metaphysics As a Guide to Morals*. (Harmondsworth).
- Norton, B. (1984) "Environmental Ethics and Weak Anthropocentrism," *Environmental Ethics* 6; reprinted in Light & Rolston (2003), pp.163-174.
- Norton, B. (1991) *Toward Unity Among Environmentalists*. (Oxford).
- O'Neil, J. (1992) "The Varieties of Intrinsic Value," *The Monist* 75; reprinted in Light & Rolston (2003), pp.131-142.
- Passmore, J. (1974) *Man's Responsibility for Nature*. (New York).
- Rolston, H. III (1994) "Value in Nature and the Nature of Value," in *Philosophy and Natural Environment*, ed. Robin Attfield and Andrew Belsey (Cambridge); reprinted in Light & Rolston (2003), pp.143-153.
- Routley (1973) "Is there a need for a New Environmental Ethic ?" in *Philosophy and Science: Morality and Culture: Technology and Man*, Proceedings of the XVth World Congress of Philosophy (Sophia). reprinted in Light & Rolston (2003), pp.47-52.
- Sayre, K. M. (1987) "The *Philebus* and the Good," *Proceedings of the Boston Area Colloquium in Ancient Philosophy* 2, pp.45-71 (with the commentary by Phillip Mistis, pp.72-78).
- Silverman, A. (2003) *The Dialectic of Essence: A Study of Plato's Metaphysics*. (Princeton).

- Skemp, J. B. (1967) *The Theory of Motion in Plato's Later Dialogues*. (Cambridge).
- Striker, G. (1970) *Peras und Apeiron. Das Problem der Formen in Platons Philebos*. (Göttingen).
- Taylor, P. (1989) *Respect for Nature*. (Princeton).
- Waterfield, R. A. H. (1980) "The Place of the *Philebus* in Plato's Dialogues," *Phronesis* 25, pp.270-303.
- Waterfield, R. A. H. (1982) *Plato: Philebus. Translated with Introduction*. (Harmondsworth).
- Weston, A. (1985) "Beyond Intrinsic Value: Pragmatism in Environmental Ethics," *Environmental Ethics* 7; reprinted in Light & Rolston (2003), pp.307-318.
- 小池澄夫 (1982) 「「分割法」考案——プラトン後期対話篇への視点」『哲学研究』545号, pp.54-76.
- 早瀬篤 (2002) 「『ピレボス』における純粋な快樂」『京都大学古代哲学史研究室紀要』12号, pp.18-42.
- 早瀬篤 (2003) 「プラトンの虚偽論(2)」『古代哲学研究』35号, pp.35-49.
- 藤澤令夫 (1980) 『イデアと世界』岩波書店.

付記 本稿は「平成15年度文部科学省科学研究補助金（特別研究員奨励費）による研究成果」の一部である。